

중국어역에 있어서의 와카(和歌)의 특징

-무산운우(巫山雲雨) 고사에 바탕을 둔 와카 분석을 중심으로-

사소 미키코*

[국문 초록]

본 논문은, 와카(和歌)의 번역방법 중 중국어역에 주목하여, 그 특징을 분석하였다. 우선, 중국의 와카 번역 연구사를 정리하였으며, 와카 번역 수법의 문제와 특징을 명확히 하였다.

이를 바탕으로, 에도·메이지시대에 볼 수 있는 한역의 수법(일본인이 와카를 한시로 번역 시도한 것)에 이르기까지 범주를 확대하여, 와카에 있어서 시대·국적을 초월 공통되는 문제의식과 특징을 탐구하였다.

또한, 중국의 번역가 호 시가이(豐子愷) 역 『이세모노가타리』, 『겐지모노가타리』의 번역방법에 관하여, 무산운우(巫山雲雨) 고사에 바탕을 두고 번역된 몇몇 해석을 중심으로 검토하였다.

번역은 자국문화를 소개하는 역할을 담당할 뿐만 아니라, 때로는 새로운 읽기(새로운 해석)의 가능성을 여는 것이라는 점에 관하여도 논하였다.

주제어 : 중국어역, 와카(和歌), 한역백인일수(漢訳百人一首), 겐지모노가타리(源氏物語), 이세모노가타리(伊勢物語)

中国語訳における和歌の特徴

—巫山雲雨の故事を踏まえた和歌の分析を中心に—

笹生 美貴子

— 차례 —

1.はじめに

2. 和歌における中国語訳の特徴

2-1. 中国語訳における和歌訳出方法をめぐ
ての議論

2-2. 中国語訳における和歌の特徴

3. 江戸・明治期における和歌漢訳の特徴

4. 豊子愷訳『伊勢物語』における和歌訳出の特徴

5. おわりに

【日本語要旨】

本稿では、和歌の翻訳方法について中国語訳に着目し、その特徴を分析する。まず、中国の和歌翻訳における研究史を整理し、和歌訳出の手法をめぐってどのような問題や特徴が見られたのかを明確にする。

その上で、江戸・明治期に見られる漢訳の手法（日本人が和歌を漢詩に訳すことを試みていた）にまで範疇を広げ、和歌における、時代・国籍を越えて共通する問題意識や特徴を探る。

また、豊子愷訳『伊勢物語』『源氏物語』における訳出方法について、巫山雲雨の故事を踏まえて訳出された箇所解釈を中心に検討する。

翻訳は自国の文化を紹介する役割を担うだけではなく、時に、あらたな読み(新解釈)の可能性を拓くものであるという点についても論じる。

キーワード: 中国語訳, 和歌, 漢訳百人一首, 源氏物語, 伊勢物語

1.はじめに

現在、『源氏物語』は多様な言語による翻訳が見られるようになった。とりわけアーサー・ウェイリーの英訳(Arthur Waley, The tale of Genji by Lady Murasaki, 6 vols. (London: George Allen & Unwin, 1925-1933))は、『源氏物語』を世界文学として世に知らしめた翻訳書として名高い。

各国より出版されている『源氏物語』の翻訳書の中で、圧倒的数を占めるのが中国語訳である。中国語訳だけでも十数種類¹⁾の翻訳が確認できるが、その中でも学術的価値が高いとされているものが、豊子愷訳(人民文学出版社 訳の完成:1965年 出版:1980~83年)・林文月訳(中外文学月刊社 1974年に初訳、2000年に修訂版、2011年に大陸版(簡体字)刊行)である。韓国語訳『源氏物語』では、柳呈訳『ゲンジ(源氏)イヤギ』(1975年 乙酉文化

1) 豊子愷訳(人民文学出版社 訳の完成:1965年 出版:1980~83年)、林文月訳(中外文学月刊社 1974年に初訳、2000年に修訂版、2011年に大陸版(簡体字)刊行)、殷志俊訳(遠方出版社 1996年)、梁春訳(雲南人民出版社2002年)、夏元清訳(吉林攝影出版社 2002年)、鄭民欽訳(「世界文学文庫」北京燕山出版社 2007年)、姚継中訳(深叻報業集團出版社 2006年、「全新修訂版」出版 2011年)、康景成訳(陝西師範大学出版社 2008年)、葉渭渠・唐月梅訳(作家出版社 2014年)など。

社)を皮切りとして、田沼新訳(1999年 ナナン社)・瀬戸内寂聴氏の現代語訳を基に作られた金蘭珠訳(2007年 ハンギル社)・李美淑訳(2014年 ソウル大学校出版文化院)・朴光華訳(2015年 図書出版香紙)が刊行されている²⁾

東アジア(日本・中国・韓国)における交流の歴史は、諸外国に比べ古く、文化的側面についても日本に大きな影響を及ぼしていることは周知の通りである。それは、『源氏物語』をはじめとした古典文学作品に描かれる年中行事や装束、独特なリズムを有する和歌の翻訳等にも如実に現れている。以上の観点から、日本の古典文学に影響を与えた側の国(東アジア)における、日本古典文学の翻訳のあり方を調査することで、諸外国には見られない、独特の翻訳方法が見出せると考えている。

本稿では、和歌の翻訳方法について着目し、その特徴を調査する。とりわけ、中国での和歌翻訳における研究史に着目しつつ、江戸・明治期に見られる漢訳の手法(日本人が和歌を漢詩に訳すことを試みていた)にまで範疇を広げ、和歌における、時代・国籍を越えて共通する問題意識を探る。

なお、韓国語訳における和歌訳出の特徴についても近年注目されている。例えば、『源氏物語』和歌の訳出について、李美淑訳(2014年刊行)に至り、和歌本来の音律数を生かすためにハングル文字の三十一字を厳守し、上の句(五七五)と下の句(七七)を二列に配置し、和歌の体裁を韓国の読者へ認識させようと試みたことについて言及されており、更なる研究成果が待たれる。³⁾

翻訳は自国の文化を紹介する役割を担うだけでなく、時にあらたな読み(新解釈)の可能性を拓くものと位置付けられる点についても試みに論じてみたい。

2) 金鐘徳「柳呈と田沼新の韓国語訳について」(伊井春樹監修・河添房江編集『源氏物語の現代語訳と翻訳』おうふう 2008年)、李美淑「『源氏物語』の韓国語訳と日本古典文学の再誕生」(『源氏物語を書きかえる 翻訳・注釈・翻案』2018年11月 青蘭舎)

3) 2)李美淑に同じ。

2. 和歌における中国語訳の特徴

2-1. 中国語訳における和歌訳出方法をめぐっての議論

今日、和歌や俳句は、日本語にとどまらず英語をはじめとした様々な国の言語で創作されることが増えてきている⁴⁾。そこからは、和歌・俳句等に見られる独特の世界観がより多くの人々に受け入れられている様子がうかがえる。

中国における日本の和歌や歌謡に関する翻訳紹介は、明代の万暦年間(1573年～1620年)に出された『日本考』や『日本風土記』に見られる。また、『万葉集』や『源氏物語』の翻訳者を手がけた錢稻孫により『日本詩歌撰』(1941年)、『漢訳万葉集撰』(1959年)が刊行されている。

その後、文化大革命後の1980年代より、中国で和歌が本格的に研究されるようになる。李芒⁵⁾により、和歌の漢訳方法に関する問題提起がなされたことを皮切りに、多様な論が陸続と提出され、現代に至っている⁶⁾。

とりわけ、様々な翻訳者により和歌の型が模索されていることは注目される。以下、「あまの原」の和歌を例に取り説明する。

【原典】あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも

(古今和歌集・羈旅・阿倍仲麻呂)

【五五七型】仰首望長天, 疑是昔時月, 昇首奈良三笠山。 李芒訳⁷⁾

4) 『THE TANKA JOURNAL』(日本歌人クラブ)、『INTERNATIONAL TANKA』(国際タンカ協会)に詳しい。なお、日本において比較的知名度が高く若手による投稿の多い伊藤園主催「お〜いお茶新俳句大賞」(<https://itoen-shinbaiku.jp/>)では、近年に至り「英語部門」が追加されている。

5) 李芒「和歌漢訳問題小議」(『日語学習と研究』1979年第1期)

6) 拙稿「和歌漢訳の手法をめぐって—江戸明治期における漢訳百人一首・漢訳『源氏物語』『伊勢物語』から見えてくる和歌解釈の可能性—」(『物語研究』第19号 2019年3月)参照。

7) 5)に同じ。

【三四三四四型】天蒼茫 仰首遙望 奈良辺 三笠山頭 昔時明月 松浦友久
訳⁸⁾

【三四三四三型】望長空 料知応是 春日境 三笠山巔 旧明月 金中訳⁹⁾

当該和歌は、百人一首にも収録されている和歌である。上記のように、和歌を中国語に翻訳するにあたり、様々な型が模索されている様子が見える。李芒は「五五七型」、松浦友久は「三四三四四型」、金中は「三四三四三型」での訳出を試みている。とりわけ、和歌の中国語訳の手法をめぐって日中研究者同士の交流の中で深められている点は、特徴的である。

中国における和歌の訳出の傾向は、先に示した三四三四三型などの独特のリズムを用いた訳し方や口語での訳出も存在するが、基本的には、定型の古典詩の詩形(七言絶句や五言絶句など)で訳出する傾向が見える¹⁰⁾。とりわけ物語の和歌は、定型の古典詩の詩形を用いて訳出する傾向にある。例えば、『源氏物語』銭訳、豊訳、鄭訳、葉・唐訳は、五言(四句)・七言(二句)からなる。林文月訳は、漢の高祖劉邦の「大風歌」を基準としつつ、語気を整える助字「兮」を初句と末句だけに使用し、中間は避けてライム(脚韻)も初句と最後の句の末字に踏み、中間の句はライムと異なった音調に気を配る、という方法を採用する。また林訳では、視覚的効果を考慮し、三つの句を字下がり形式で記載する特徴が見られる¹¹⁾。

8) 5) に同じ。

9) 金中「和歌的翻訳—“三四三四三”型訳法」(『日本詩歌翻訳論』北京大学出版社 2014年)→【初出】「“三四三四三”形式による和歌の漢譯」(『中国詩文論叢』28 2009年3月)

10) 吳衛峰(「日本古典詩歌の中国語訳について(その一)—謝六逸とその『日本文学史』」『東北公益文科大学総合研究論集』16 2009年6月)により、「中国の文言一致運動以来、日本の古代詩歌を含め、外国の文芸作品を白話文、つまり現代口語文に訳すのが当然のこととなっていたのに、いつの間にか、日本の古典詩歌のみが文語体で訳されるようになった」と指摘されている。

11) 林文月(「源氏物語の中国語訳について」『源氏物語の探究』第7巻 笠間書房 1982年)、拙稿「豊子愷訳『源氏物語』における明石像—明石入道の見た夢の訳出方法を起点として—」(『夢見る日本文化のパラダイム』法蔵館 2015年5月)、拙稿「豊子愷訳・林

次節において、物語の和歌の翻訳方法を分析していく。

2-2. 中国語訳における和歌の特徴

『源氏物語』をはじめとした日本古典文学作品には、中国文学(以下、漢籍と記す)の影響が色濃くうかがえる。とりわけ、そのような部分を中国語に翻訳する際には、引用元の漢籍の単語を用いるケースが確認される。また、漢籍引用が見られない部分に、漢籍の世界観を織り込む手法も確認される。このような手法は、日本古典文学作品に直接影響を与えた中国特有の翻訳方法といえよう。以下、例を示す。

なお、銭訳『伊勢物語』と豊訳『伊勢物語』は、一段のズレが生じている¹²⁾。

【原典】わが方によると鳴くなるみよしののたのむの雁をいつか忘れむ
(『伊勢物語』「十 たのむの雁」)

【銭稻孫訳】「第九段」

不嫌三吉野 田上雁飛鳴
有意殷勤過 如何忘此情

【豊子愷訳】「第九話」

吉野忠誠雁, 声声向我鳴,

文月訳『源氏物語』『伊勢物語』における和歌の訳出方法—修辭法・注釈・英訳との比較を中心に—(『2018年中国文化大学外国語文学院日本語日本文学系国際学術検討会—論文集』中国文化大学日本語文学系 2018年5月)に詳しく論じている。

12) 豊訳『伊勢物語』は、中河与一訳を翻訳している。中河与一訳は、『伊勢物語新釋』を元として作られたものであり、一段のズレが生じている。そのため、豊訳においても、一段のズレ生じている(徐迎春「豊子愷訳『伊勢物語』について」(『文献探究』第48号、2012年10月)に詳しい)。また、銭訳『伊勢物語』においても、豊訳同様に一段のズレが生じている。豊は、『伊勢物語』訳出の際、銭訳にも目を通していているため、銭訳の方針を継承したものと推察される。

我心非木石, 永遠不忘情。

【林文月訳】「十 託雁」

謂頼我兮云相託,
三芳野雁鳴可憐,
豈敢輒忘兮將守諾。

【唐訳】「第十段」

優雅雁鳴誠可愛,
情深水志不忘懷。

【張・邱・廖訳】「十 隴上雁」

隴上雁声声, 翹首向我鳴。
我心非木石, 戚戚不忘情。

当該歌は、男が武蔵の国の女に求婚した際、その女の母から送られてきた歌に返歌をしたものである。歌意は、「私に心をよせる、とおっしゃっておいでだという三芳野の里にいるあなた様の娘御を、いつの日に忘れましょうか、忘れはいたしません」である。ここには、漢籍引用を強く認め得る要素は見られない。

だが、銭訳、豊訳、林訳、唐訳、張・邱・廖訳¹³⁾の5訳のうちの、豊訳と張

13) 中国語訳『伊勢物語』(完訳)は4種類存在する。豊子愷(佚名氏)訳『伊勢物語』(雲南人民出版社 2002年3月)→上海訳文出版社 2011年、中河与一訳を翻訳したもの、唐月梅訳『伊勢物語図典』(上海三聯書店 2005年)、林文月訳図『伊勢物語』(訳林出版社 2011年)、張龍妹・邱春泉等訳『日本和歌物語集』(『伊勢物語』外国教学与研究出版社 2015年)である。また、部分訳として銭稻孫訳がある。『芸文雑誌』第1巻第1期(1943年)に1~13段、第1巻3期(1943年)に14~16段、第2巻第10期(1944年)に26~35段が掲載されている。本稿では、上記5訳(銭稻孫訳が無い和歌の考察は4訳)を考察の対象とし、とりわけ学術的評価の高い豊訳と林訳の和歌の訳出方法や注釈態度を中心に検討している。拙稿「和歌漢訳の手法をめぐって—江戸明治期における漢訳百人一首・漢訳『源氏物語』『伊勢物語』から見えてくる和歌解釈の可能性—」(『物語研究』第19号 2019年3月)にも詳しく論じてある。

・邱・廖訳では、傍線部分の箇所について、「人非木石」や「身非木石」(人は木石ではなく皆情の心を持っている)という表現を織り交ぜつつ訳文を作成している¹⁴⁾。

この表現は、中国に古くからみられるものである。例えば『詩経』「国風 柏舟」に「我心匪石 不可転也」、『白氏文集』「李夫人」に「人非木石皆有情」、『文選』司馬遷「報任少卿書」に「身非木石、独与法吏為伍、深幽圜圜之中、誰可告愬者」とある。また、豊訳では「声声」という疊語を用いることで詩のリズムの音声的な効果を表現している様子も見られる。張・邱・廖訳は、豊訳を参考にしつつ、「戚戚」という疊語を新たに使用するなどし、独自性を追求している。

銭訳では、「有意殷勤過 如何忘此情」と、「慙慙」(ねんごろ、丁寧)の語を用いつつ、男の女へ対する思いを表現している。歌の意をできるだけ汲み取りつつ漢詩の形式にしている様子が見えがえる。林訳は先述のように、和歌に語気を整える語である「兮」を入れている点の特徴としてあげられる。また、「豈敢輒忘兮將守諾」と反語表現の「豈敢」を用いて、自分に心を寄せる女性を忘れないことを強調している。

なお、林訳以外では当該箇所に「情」の語が見られる。ここでは、自分に心を寄せる女性に対するしみじみとした情趣を強調して訳出に反映させている。林訳では、その前の句「三芳野雁鳴可憐」に、自分に心を寄せてくれる女をしみじみと愛おしく感じる様子を強調して訳出している。また、唐訳では、「可愛」と「情」の二語を訳出にあてはめることで、男性の感情をより一層強く表現している。

14) 豊が参考にした中河与一訳「第九話」を提示しておく。中河の訳を確認しても、漢籍引用の要素は認められない。よって豊子愷なりの世界観が表現されている部分であることが分かる。
我が方によると鳴くなるみよし野のたのむの雁をいつか忘れむ
(私の方へなびき寄るといつて鳴いてくれるその雁の優しい心をいつの世に忘れてよいものか 私は何時まで可愛がらましよう。)

豊の手法は、中国の読者にとって、和歌の意味合いがより分かりやすくなるという利点がある¹⁵⁾。だが、その一方で、漢籍引用の見られない和歌に、新たに中国色を付加させた上で訳出しているという問題も見られる。

つぎに、もともと漢籍引用の認められる和歌の訳出方法について確認する。

【原典】 雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ
(『源氏物語』「葵」巻)

【豊子愷訳】

為雨為雲皆漠漠，
不知何処是芳魂。

(脚注)此詩及劉禹錫詩，皆根据宋玉《高唐賦》中語；“昔者，先王裳游高唐，而昼寢，夢見一婦人，曰‘妾巫山之女也，為高唐之客，聞君游高唐，愿荐枕席’。王因幸之。去而辞曰：‘妾在巫山之陽，高丘之岨，旦為朝雲，暮為行雨。朝朝暮暮，陽台之下。’旦朝視之，如言。”

【林文月訳】

旦為雲兮暮為雨，
浮雲朵朵滿天遊，
芳魂何処兮摧肺腑。

(注釈)昭明文選宋玉高唐賦序云：「妾在巫山之陽高丘之岨，旦為朝雲；

暮為行雨，朝朝暮暮陽台之下。旦朝視之如言。」按：源氏所吟劉禹錫詩句亦用此典。中將作歌乃謂：其妹亡魂或已化為朝雲暮雨，然而眺望空中，但見浮雲朵朵 不辨在何方，徒摧肺也。

当該歌は、光源氏の正妻葵上が亡くなり、光源氏がその悲しみ故に「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」とつぶやいているのを頭中將が聞き、詠んだ和歌である。歌意は「雨となってしぐれる雲の浮雲は、煙となつてのぼっていった亡き人(葵上)の姿であろうが、さて今の浮雲のどれをそれと見分けて眺めようか」である。この場面には、中国で広く膾炙されている巫山雲雨の故事が色濃く反映されている。

巫山雲雨の故事

『全唐詩』劉禹錫

有所嗟 夢得
庾令樓中初見時
武昌春柳似腰支
相逢相失兩夢如
為雨為雲今不知

鄂渚濛濛雨烟微
女郎魂逐暮雲歸
只應長在漢陽渡
化作鴛鴦一隻飛

『文選』宋玉「高唐賦」

昔者楚襄王、与宋玉遊於雲夢之台。望高唐之觀、其上独有雲氣。崕兮直

15) 田中幹子・鄭寅璣(「錢稻孫訳『源氏物語』の特徴について(上)」、『比較文化論叢28』2013年3月)は、「豊氏は『源氏物語』を訳した上での自信からか、錢訳を参考にしながらも「若紫」を「新緑」、「相思苦」など中国読者が理解しやすいことを優先した訳をしている」と言及されている。

上、忽兮改容。須臾之間、變化無窮。王問玉曰、此何気也。玉対曰、所謂朝雲者也。王曰、何謂朝雲。玉曰、昔者先王嘗遊高唐、怠而昼寢。夢見一婦人、曰、妾巫山之女也。為高唐之客。聞君遊高唐、願薦枕席。王因幸之。去而辞曰、妾在巫山之陽、高丘之阻。旦為朝雲、暮為行雨。朝朝暮暮、陽台之下。旦朝視之如言。故為立廟、号曰朝雲。王曰、朝雲始出、状若何也。玉対曰、其始出也、嚙兮若松櫛。其少進也、晰兮若姣姬揚袂鄣日而望所思。忽兮改容、偁兮若駕駟馬建羽旗。湫兮如風、悽兮如雨。風止雨霽、雲無處所。王曰、寡人方今可以遊乎。玉曰、可。王曰、其何如矣。玉曰、高矣、顯矣、臨望遠矣。廣矣、普矣、万物祖矣。上屬於天、下見於淵。珍怪奇偉、不可称論。王曰、試為寡人賦之。玉曰、唯唯。

『文選』「神女賦 并序」宋玉

楚襄王、與宋玉遊於雲夢之浦、使玉賦高唐之事。其夜玉寢、果夢與神女遇、其状甚麗。玉異之、明日以白王。王曰其夢若何。…(中略)… 情独私懷、誰者可語。惆悵垂涕、求之至曙。

光源氏がつぶやいた言葉「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」は、劉禹錫の詩句に見られる「為雨為雲今不知」の部分と和語に直したもとなっている。実際、「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」の訳出は、豊訳では「為雨為雲今不知」(劉禹錫の詩句)、林訳では「為雨為雲今不知」(『文選』宋玉「高唐賦」の本文)となっており、典拠となる漢籍をそのまま訳出にあてはめていることがわかる。これは、中国語訳にしかできない翻訳方法であり一つの特徴として注目される。

当該和歌の訳出では、「雨となりしぐるる空」部分の訳出において、豊訳と林訳では、共に巫山雲雨の故事を踏まえつつ訳出しているが、若干語句が異なっている。豊訳では、先に源氏がつぶやいた言葉の典拠とな

る劉禹錫の詩句「為雨為雲今不知」を訳にあてはめ「**為雨為雲**皆漠漠」としている。一方、林訳は『文選』宋玉「高唐賦」の「旦為朝雲、暮為行雨」という部分を訳に当てはめ「**旦為雲兮暮為雨**」している。さらに林訳は、「浮雲朵朵滿天遊」部分の訳出にあたり、注釈に示されている『高唐賦』の内容を説明した語句を訳出に反映させていることがうかがえる。

このように、中国語訳では、典拠となる漢籍の語句をそのまま訳出に反映させるといった、独特の手法がなされているのである。中国の読者にとっても、『源氏物語』の内容がよりわかりやすく理解できる利点があるろう。

3. 江戸・明治期における和歌漢訳の特徴

和歌を中国語に翻訳する上で生じる問題は、江戸・明治期における古典文学作品の漢訳にも共通して見られたと言える。

実際、岡田袈裟男「李芒先生歓迎座談会—中国における日本文学研究の現状」(『古代研究』第10号1979年9月)にて、日本の和歌における翻訳方法について、李芒と柳瀬喜代志による以下ようなやりとりが載せられている。

柳瀬 今のお話いろいろ面白かったのですが、江戸時代の中期ぐらいになりますと、こんどは俳句をですね、漢詩風に読むというのが流行ってくるんですね(以下略)。

李芒 大変あの貴重な御意見で、以後参考にさせていただきたいと思います。

ここにおいて、江戸期において俳句を漢詩風に詠むことと和歌の翻訳(中国語訳)への接点を見出す議論の展開されている点は、傾聴に値する。

また、江戸後期から明治にかけての漢学者であり、日本古典を漢訳した菊池三溪¹⁶⁾は、日本の作品の漢訳について、以下のような見解を示しており興味深い。中国で有名な水滸伝・西游記・金瓶梅・三國志演義などは、邦訳すなわち日本語に翻訳されており、日本人に広く膾炙されている。日本側の作品『源氏物語』『伊勢物語』『竹取物語』も魅力的で不思議なほどに優れている作品であるため、中国の人々にも読んでもらいたい、ということが『譯準綺語』『自序』に綴られているのである。

以下、和歌の漢訳として百人一首を例に取り、江戸・明治期において和歌がどのように漢訳されているのか確認する。漢訳百人一首にふれるにあたり、玩究隱士編『漢詩訳百人一首五種』¹⁷⁾に掲載されている5種類の漢訳を取り上げ、漢訳の手法について検討する。紙幅の関係上、2首分を例として取り上げ、提示する。(※語釈は、『大漢和辞典』『漢語大詞典』を参照した)

【原典】今こんといひしばかりに長月の有明月を待出づるかな 素性法師

・原景忠『小倉百首名歌詩』

有約慇懃雖領妍 約有り 慇懃 妍を領くと雖も

16) 菊池三溪『譯準綺語』『自序』(王三慶 莊雅州 陳慶浩 内山知也主編『日本漢文小説叢刊』第一輯 第一冊「筆記叢談類一」)なお、王曉平(王曉平《垂洲漢文学》(天津人民出版社 2009年))は、菊池三溪の「自序」に着目し、当時、日本小説の漢訳本が入手可能であったにも関わらず、中国には入ってこなかったことが遺憾であるとし、もし当時の中国人が漢訳された作品を読んでいたら大いに注目していただろう、と言及される。

17) 玩究隱士編『漢詩訳百人一首五種』(太平文庫79 2016年)
(本歌)小倉百人一首/原景忠『小倉百首名歌詩』宝曆十二年(1763年)序(明治十四年刊行本)/衡山人以德『華和合珠百人一首』安永二年(1773年)序/橘維獄『寄言百人一首』安永三年(1774年)刊/小畑行簡『百人一首』弘化三年(1847年)刊/小宮水心『詩文意訳百人一首』明治四十一年(1919年)刊

玉人不到自相憐 玉人到らず 自ら相憐れむ
長援暮雨朝雲恨 長へに暮雨朝雲の恨みを援けて
待見残秋残月天 待ち見る 残秋残月の天を
※「慇懃」ねんごろ、丁寧。「残月」有明の月。

・衡山人以德『華和合珠百人一首』

秋夜待君罷 秋夜 君を待ち罷み
露侵玉樹懸 露は玉樹を侵して懸かる
閑歩疎簾外 閑歩す 疎簾の外
残月惱人円 残月 人を悩まして円かなり
※「玉樹」美しい木。「閑歩」ぶらぶら歩き、そぞろ歩き。「疎簾」まばらに編んだすだれ。

・橘維獄『寄言百人一首』

待人不来 人を待つて来たらず
君来兮君来 君来たらん 君来たらんとて
秋夜不為寝 秋夜 寝ぬることを為さず
更深空相望 更深けて空しく相望めば
却月照東廡 却月 東廡を照らす
※「却月」半月。

・小畑行簡『百人一首』

一許諾言曾不忘 一許諾の言
待来今夜夜偏長 待ち来たる今夜 夜偏に長し
碧窓孤座無人到 碧窓孤座 ひとの到る無し
空伴氷輪怨断腸 空しく氷輪を伴ふて怨み断腸

※「碧窓」緑色の薄絹をかけた窓。「氷輪」月の異称。「断腸」甚だしく心を痛める。

・小宮水心『詩文意訳百人一首』

奈此秋宵永 此の秋宵の永きを奈ん
只徒更漏催 只徒らに更漏催す
相期人不訪 相期するの人訪はず
無意月空来 意無くして月空しく来たる
※「更漏」時を報ずる漏刻(水時計)。

当該歌は、今すぐに参ります、とあなたが言ったので私は待ち続けたのですが、とうとう明け方になり有明の月が出て来てしまった、という内容である。待ち人が来なかった女の悲しさが表現された和歌といえる。

5首あげたうちの、原景忠『小倉百首名歌詩』のみ、当該和歌の漢訳に際し、「長援暮雨朝雲恨」と、巫山雲雨の故事を積極的に取り入れている点は注目される。男女の逢い難い様子を巫山雲雨の故事を引き合いに出すことで、中国の人々に歌意をわかりやすく説明する工夫がほどこされているところと考えられる。

【原典】あらざらむ此世のほかの思ひ出に今一度あふ事もがな 和泉式部

・原景忠『小倉百首名歌詩』

紫羅帳裏独沈痼 紫羅帳裏 独り沈痼
久失佳期使妾慕 久しく佳期を失して 妾をして慕はしむ
縦到黄泉不可忘 縦ひ黄泉に到るも忘る可からず
今猶一夕欲相遇 今猶 一夕 相遇はんと欲す

※「紫羅」紫色の薄衣、「沈痼」長年久しく癒えない病、「佳期」良い時期、「黄泉」死者の行く所、あの世。

・衡山人以德『華和合珠百人一首』

病軀如草露 病軀 草露の如し
生死有後前 生死 後前有り
願応経世裡 願はくは 応に世に経る裡
会面先黄泉 会面 黄泉に先だつべし
※「草露」物事のはかないことのたとえ

・橘維獄『寄言百人一首』

惜長別 長別を惜しむ

二豎為崇久 二豎崇を為すこと久し
憑誰通慇懃 誰に憑つてか慇懃を通ぜん
不愛此身没 此の身の没するを愛まず
只願一会君 只願はくば一たびに君に会せんことを
※「二豎」「豎子」は子どもの意。「二豎」は、重病となった晋の景公の夢に、病魔が二人の子どもの姿となって現れた故事を示す。

・小畑行簡『百人一首』

豈無来世因縁在 豈来世因縁の在る無からんや
一去黄泉竟不還 一たび黄泉に去りて竟に還らず
地下相逢能幾日 地下相ひ逢ふこと 能く幾日ぞ
生前只要看君顔 生前只要す 君が顔を看ることを

・小宮水心『詩文意訳百人一首』

妾若帰泉下 妾若し泉下に帰さば
 旧歡争可尋 旧歡 争でか尋ぬ可けん
 生前願相見 生前 願はくは相見え
 仔細話丹心 仔細に丹心を話せん
 ※「泉下」冥土。「旧歡」昔の楽しみ。「丹心」まごころ。

当該和歌は、私は死んでしまうだろう、あの世へ持って行く思い出に今一度お会いしたいものです、という意である。ここにおいて、「此世のほかの」部分を「黄泉」(4訳)、「泉下」(1訳)と訳出している点は見逃さない。中国色が付加された訳出となっていることがわかる。

また、橘維獄『寄言百人一首』の「二豎為崇久」部分には、故事成語である「病膏肓に入る」(治療の施しようもないほど病気が重くなる)が踏まえられている。出典は『春秋左氏伝』である。以下、引用する。

『春秋左氏伝』 「成公十年」

公夢。疾為二豎子曰、彼良医也。懼傷我。焉逃之。其一日、居肓之上、膏之下、若我何。医至。曰、疾不可為也。在肓之上、膏之下。攻之不可。達之不及。藥不至焉。不可為也。公曰、良医也。厚為之礼而歸之。

すなわち、橘維獄『寄言百人一首』では、「あらざらむ」(私はもう死んでしまうだろう)という和泉式部の恋煩い故のどうにもならない苦しみを、漢籍を典拠とする故事「病膏肓に入る」を訳出に積極的に取り入れることで、中国の読者に分かりやすく説明していると言えよう。

だが、その一方で、先にふれた『伊勢物語』和歌の中国語訳同様、漢籍引用の見られない和歌に、新たに中国色を付加させた上で訳出しているという共通する問題も見られる。

4. 豊子愷訳『伊勢物語』における和歌訳出の特徴

豊訳では、男女の情愛関係の場面において、巫山雲雨の故事を意識して訳出する特徴が見られる¹⁸⁾。以前、『伊勢物語』第七十五段「海松」の和歌「袖ぬれてあまの刈りほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやする」の豊訳「莫非只要常相見、不作巫山雲雨仙？」に着目し、何故、豊は巫山雲雨の故事を訳出に反映させたのかという点について論じた¹⁹⁾。

豊訳『伊勢物語』では、巫山雲雨の故事を意識して訳出した段があと2例存在する。そのため、本稿では、残りの2例も分析の対象とし、私見を述べる。

【原典】あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじとぞ思ふ
 (『伊勢物語』「二十二 千夜を一夜」)

【豊子愷訳】「第二十一話」

不作巫山会、神交自怡悦。

猶如島旁水、既分終当合。

【林文月訳】「二十二 千夜如一夜」

既相見兮心不別、

猶似水流遇中洲、

雖云驟分兮終未絶。

(箋注)此為男子曉諭愛情之歌。謂：既已相逢而結縁(古代日人「見」為男女愛情契合之詞)、則当互相將心融合、猶如川河之水流、即使遇洲島而

18) 雋雪艶(「賞標準の多様化と詩歌翻訳策略的選択」『東亜詩学与文化互読—川本皓嗣古稀記念論文集』2009年10月)は、「訳者過進一步用了中国古代文化中有關“巫山雲雨”的典故、從效果上看會認人覺得日本古代詩歌的内容与中国古典詩歌充分接近」と述べる

19) 6)に同じ。

驟分, 終当複合, 不可断絶分別也。

【唐訳】「第二十二段」

本想不再来相会,
島旁流水終環回。

【張·邱·廖訳】「二十二 千夜如一夜」

水遇中洲分亦合,
夫妻恩愛結同心。

当該歌は、特に愛情も深くないまま仲が絶えてしまったものの、女側に未練があったのか歌が届く。それに男が返歌したものである。歌意は「お互いに夫婦となったからには、ただもう真心を交わして、丁度川の水が中州に塞かれて別れても、再び一緒に流れるように、絶えることがあるまいと思いますよ」である。歌を交わした後、男は以前に比べて一層情を込めて女のところへ通う展開となっている。

中国語訳を眺めてみると、豊訳のみ「不作巫山会, 神交自怡悦」と、巫山雲雨の故事を当該和歌に強く織り込み、訳出している様子がうかがえる。豊は、男が女に対し、再び一緒になることを願うところに、巫山雲雨の故事との類似性を見て訳に反映させたのではないかと考える²⁰⁾。

【原典】袖ぬれてあまの刈りほすわたつうみのみるをあふにてやまむ

20) 豊が参考にした中河与一訳「第二十一話」の原文と訳においても、巫山雲雨の故事が踏まえられているものとはなっていない。よって、当該和歌には豊子愷なりの世界観が表現されていることが分かる。以下、中河与一訳「第二十一話」を引用する。

逢ひは見で心ひとつをか島の水の流れ絶えじと思ふ
(もう逢うことはやめて、清い交際にとどめておけば、中島をはさんで流れる川水が一度は別れてもあうように、行く末長く絶えないで居れるだろう。)

とやする

(中略)

世にあふことかたき女になむ。

(『伊勢物語』第七十五段「海松」)

【豊子愷訳】「第七十四話」

莫非只要常相見,
不作巫山雲雨仙?

(中略)

這個難于通情的女子, 世間少有其例。

【林文月訳】「七十五 海松」

神盡濕兮漁人愁,
海上尋刈豈有極,
如何未逢兮便罷休。

(中略)

世上竟有如此難以誘引的女子哩。

(箋注)平安時代男女情書不避諱啼泣流泪之真情表露, 而時人褒衣大袖, 多以袖端拭泪, 故“袖濡”為多泪之代詞。歌意謂: 潮打漁人袖尽濕, 亦在所不惜, 旨在海上尋刈漁獲物, 如何能未得便罷休? 以漁人尋刈魚貝類為比喻, 言己亦為情所愁而泪濕袖, 然既未得与女相逢, 絕不罷休也。

【唐訳】「第七十五段」

莫非只求常相見,
无意尋覓樂歡天。

(中略)

此乃世間難得一見的女子。

【張・邱・廖訳】「七十五 千夜如一夜」

但見水松生海辺、

不得相会泪連漪。

(最後の一文無し)

当該歌は、男が女と共に伊勢の国へ行き住もうと誘ったものの、冷淡な様子であったため、男が和歌に託して情愛の深さを訴える部分である。歌意は「海松は、袖を濡らして海女が刈り干すもの、私は、こんなにも涙ながらの思いであなたを見ているのに、その見ることだけを逢うかわりにして、終わりにしようとするのですか」である。

ここで注目されるのは、豊訳の「不作巫山雲雨仙?」という訳出である。豊訳において、当該歌に巫山雲雨の故事を反映させていることは興味深い。恐らく中河の現代語訳から着想を得たものとも考えられるところである²¹⁾。ともあれ、豊は、巫山雲雨の故事の世界観(男女の情の細やかさや、情を交わすこと)に類似性を感じ、訳に反映させていることが分析により明らかとなった。

ところで、当該段(『伊勢物語』第七十五段「海松」)は、齋宮章段に組み込まれていると見るか否かで、古くから解釈が割れている²²⁾。つまり、当該段には在原業平と齋宮の禁忌の恋を描かれている可能性が指摘されているのだ。それを考えてゆくにあたり、豊訳に巫山雲雨の故事が当ては

21) 以下、豊が参考にした中河の一訳「第七十四話」を引用する。傍線部に示した、物語の最後の一文(訳)が、巫山雲雨を想起させる文脈として機能しているのではないか。
袖ぬれて蜚の刈り乾すわだつみのみるを逢ふにて已まむとやす
(ただ見るだけの喜びで 逢うことの喜びをあなたは やめようとなさるのですか。)
(中略)

と詠んだ。この女は世に例の少ない逢うことの難しい女であった。

22) 鈴木日出男『伊勢物語評解』(筑摩書房 2013年.)

められている点は、見逃せない。豊訳を通して改めて当該段を分析すると、そこには、女に逢い難い男の姿が浮かび上がってくる。また、人間と神の恋という観点からは、禁忌性のニュアンスも浮上してこよう。

すなわち、豊訳に見られる巫山雲雨の世界観一男と神女との恋一を当該和歌に積極的に読み込むことで、逢い難い女(神に仕える女である齋宮)を思う男(在原業平)との恋という、禁忌性を帯びた恋のニュアンスを、より鮮明に読み取ることが可能となるのである²³⁾。

【原典】あふなあふな思ひはすべしなぞへなくたかきいやしき苦しかりけり

(『伊勢物語』第九十三段「たかきいやしき」)

【豊子愷訳】「第九十二話」

鳥鵲双飛楽无, 須学鳳凰。

我応怜碧玉, 何苦夢高唐。

【林文月訳】「九十三 門下当戸不对」

莫思慕兮莫愛恋,

高門賤戸不相当,

徒惹苦惱損兮顔面。

(箋注)《古今六帖》第五、深相思、有近似之作。平安時代特重身分門第。身分卑微之男子、愛上身分較自己高貴之女子、自是不容易有好結果、故有此詠。和歌淺易明白、作者託為古人之作、而於末尾作出門戸不相当之相思、自不免於苦惱之結論。

23) 6)に同じ。

【唐訳】「第九十三段」

自知之明人应有,
何必高攀自苦求。

【張・邱・廖訳】「九十三 話貴賤之別」

欲夢高唐未成眠,
古来貴賤終有別。

当該和歌は、身分の低い男が、身分の高い女に懸想をしたものの、思いわずらって詠んだ歌である。歌意は「身分相応に恋はするものがよい。比べようがないほど身分の高い者と低い者との恋は、苦しいものなのだなあ」である。

豊訳では、「鳥鵲双飛楽无, 須学鳳凰。我应怜碧玉, 何苦夢高唐。」とあり、巫山雲雨の故事が踏まえられている。身分の貴賤を「鳥鵲」「鳳凰」で対比している点も、豊訳の特徴としてあげられる。豊訳では、神女に会うことの難しいとする男側の嘆きを、当該和歌に織り込み、訳出したと考えられる

豊訳と張・邱・廖訳では「夢高唐」とあり、巫山雲雨の故事が踏まえられている様子がうかがえる²⁴⁾。後者の訳は、恐らく豊子愷訳の世界観を参考にしつつ作成した和歌といえよう。豊訳では、神女に会うことの難しいとする男側の嘆きを、巫山雲雨の故事—神と人間の格差のある恋模様—を踏まえることで表現したと考えられる。

林訳と唐訳では、比喻や故事を駆使している豊訳と事なり、男の心情を直接的に訳出している。とりわけ、林訳では箋注において、当時の平安貴

族が身分を重んじる様子について記しており、中国語を母語とする読者が理解しやすい工夫がなされている。

5. おわりに

以上、中国語における和歌の翻訳方法に着目し、その特徴を分析した。中国語訳では、漢籍の影響が見られる和歌を翻訳する際は、引用元の漢籍の単語を用いるケースが確認された。その一方で、漢籍の影響が見られない和歌についても漢籍の世界観を織り込む手法も確認された。

後者は誤訳ともとれるところであるが、『伊勢物語』第七十五段「海松」での豊訳に見られたように、翻訳を通して、古来より解釈の別れていた部分に一石を投じるような役割を果たすこともあるのではなかろうか。

※簡体字・繁体字・旧漢字は、可能な限り常用漢字に改めた。

※『源氏物語』『伊勢物語』の引用は、「新編日本古典文学全集」に依りつつ、私に校訂したところがある。

※漢籍の引用は以下のとおりである。

『詩経』(『毛詩正義』『十三經注疏』新文豊出版)、『白氏文集』(謝思煒校注『白居易文集校注』中華所局)、『全唐詩』(上海古籍出版社)、『文選』(李培南・李学穎等標点『文選』上海古籍出版社)、『春秋左氏伝』(『春秋左傳正義』『十三經注疏』新文豊出版)

なお、漢籍引用の際、私に校訂を施したところがある。

24) 以下、中河与一訳「第九十二話」を引用する。

おふなおふな思ひはすべしなぞへなく高き賤しき苦しかりけり

(人は身分に従って 恋をするのがよい。くらべものにもならないほど高い人を低い者が恋するほど苦しいことはない。)

[ABSTRACT]

Translation strategies of Japanese waka poetry into Chinese:
 borrowings from the rhapsody Dream
 on Mount Wu contained in the Wen Xuan.

Saso, Mikiko(Japanese University)

In this paper, I discuss the strategies involved in translating Japanese waka poetry into Chinese. First, I make an account of previous research in this field, in order to point out major issues in translating waka poetry from Japanese to Chinese.

Second, I analyze some waka translations into classic Chinese made by Japanese scholars of the Edo and Meiji periods, to identify key strategies across different ages.

Last, I focus on Feng Zikai's Chinese translation of waka contained in The Tale of Genji and The Tale of Ise, in which he made vast use of words and expressions borrowed from Dream on Mount Wu, a rhapsody from the Wen Xuan, one of the earliest and most important anthologies of classic Chinese poetry.

In this way, I can point out that translation is not a mere introduction to a foreign culture, but it is a vital process by which new interpretations can be achieved.

Keyword : Chinese translation, waka, Hyakunin isshu, The Tale of Genji, The Tale of Ise

[参考文献]

□ 単行本

張龍妹・邱春泉等訳『日本和歌物語集』、外国教学与研究出版社、2015年。
 松浦友久『中国詩歌原論—比較詩学の主題に即して』、大修館書店、1986年
 金中「和歌的翻訳—三四三四三"型訳法」、『日本詩歌翻訳論』、北京大学出版社、2014年。

玩究隠士編『漢詩訳百人一首五種』、太平文庫79、2016年。

鈴木日出男『伊勢物語評解』、筑摩書房、2013年。

徐迎春『豊子愷訳日本古典文学翻訳研究平安朝物語の中国語訳に関する研究—先駆者としての豊子愷の訳業について』、上海交通大学出版社、2015年。

□ 論文

金鐘徳「柳呈と田溶新の韓国語訳について」伊井春樹監修・河添房江編『源氏物語の現代語訳と翻訳』、おうふう、2008年。

李美淑「『源氏物語』の韓国語訳と日本古典文学の再誕生」寺田澄江等編『源氏物語を書きかえる翻訳・注釈・翻案』、青蘭舎、2018年。

李芒「和歌漢訳問題小議」『日語学習与研究』、1979年 第1期

呉衛峰「日本古典詩歌の中国語訳について(その一)—謝六逸とその『日本文学史』」『東北公益文科大学総合研究論集』第16号、2009年。

笹生美貴子「和歌漢訳の手法をめぐって—江戸明治期における漢訳百人一首・漢訳『源氏物語』『伊勢物語』から見えてくる和歌解釈の可能性—」『物語研究』第19号、2019年。

笹生美貴子「豊子愷訳『源氏物語』における明石像—明石入道の見た夢の訳出方法を起点として—」荒木浩編『夢見る日本文化のパラダイム』、法蔵館、2015年。

笹生美貴子「豊子愷訳・林文月訳『源氏物語』『伊勢物語』における和歌の訳出方法—修辞法・注釈・英訳との比較を中心に—」『2018年中国文化大学外国語文学院日本語日本文学系国際学術検討会—論文集』、中国文化大学日本語文学系、2018年.

林文月「源氏物語の中国語訳について」『源氏物語の探究』第7巻、笠間書房、1982年.

田中幹子・鄭寅瓏、「銭稻孫訳『源氏物語』の特徴について(上)」『比較文化論叢28』、2013年.

林文月「源氏物語の中国語訳について」、『源氏物語の探究』第7巻、笠間書房、1982年.

田中幹子・鄭寅瓏、「銭稻孫訳『源氏物語』の特徴について(上)」、『比較文化論叢28』、2013年.

雪艶「鑿賞標準的多様化与詩歌翻訳策略的選択」、『東亜詩学与文化互読—川本皓嗣古稀記念論文集』、2009年小田切文洋「中国語訳『源氏物語』の訳者とその訳文について(一)」、『国際関係学部研究年報』第30集、2009年.

呉川「『源氏物語』における和歌の対訳研究—「桐壺」の中国語訳を中心に」、『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第9号、2008年.

山田利博「豊子愷による『源氏物語』中国語訳について」、『平安文学の交響享受。摂取。翻訳』、勉誠出版、2012年.

ッパタナ・クリステワ「日本古典文学の〈開かれた構造〉」、『異文化理解の視座世界からみた日本、日本からみた世界』、東京大学出版、2003年.

岡田袈裟男「李芒先生歓迎座談会—中国における日本文学研究の現状」、『古代研究』第10号、1979年.

楊曉文「中国における『源氏物語』全訳の成立に関する一考察—豊子

愷、銭稻孫、周作人の関わりを中心に」、『中国研究月報』第66巻第2号、2012年.

□ その他(翻訳書)

豊子愷訳『源氏物語』、人民文学出版社、1980～83年.

林文月訳『源氏物語』、洪範書店有限公司、2000年.

豊子愷(佚名氏)訳『伊勢物語』、上海訳文出版社、2011年.

唐月梅訳『伊勢物語図典』、上海三聯書店、2005年.

林文月訳図『伊勢物語』、訳林出版社、2011年.

張龍妹・邱春泉等訳『日本和歌物語集』、外国教学与研究出版社、2015年.

銭稻孫訳『伊勢物語』、『芸文雑誌』第1巻第1期(1943年)、第1巻3期(1943年)、第2巻第10期(1944年)

접수일 : 2019. 07. 15 총평일 : 2019. 08. 12 게재확정일 : 2019. 08. 20.